

小樽市教育研究所報

環流



第191号 令和6年12月20日

<目 次>

児童の活動：花園小学校	P1
巻頭言：若 林 晋 校長	P1
教育実践紹介：桂岡小学校	P2
所内検証授業 1, 2	P3
北海道教育研究所連盟網走大会	P4



【地域との連携】

毎年、「花園小学校・菁園中学校・花園連合町会」梯団として「潮ねりこみ」に参加

【持続可能な小中連携】

地の利を生かした菁園中学校文化祭の合唱参観



教育を通じたウェルビーイングの向上を目指して

小樽市立花園小学校 校長 若 林 晋

本校は、明治36年開校し、昨年開校120周年を迎えた市内でも歴史と伝統に育まれ、地域の願いに支えられてきた学校です。雪の結晶と桜の花びらをあしらった校章は、郷土を愛する先人の願いが込められており、数度の大火にも負けず花園の高台より小樽を見守り続けています。

春のグリーンロード清掃には、市役所と連携し、町内会等関係団体と共同し清掃活動を行っています。また、小樽の風物詩「潮まつり」のねりこみには、「花園小学校・菁園中学校・花園連合町会」梯団として100名以上の大梯団を組み、元気に参加します。PTA・町内会とのつながりを強く感じる行事です。そこに共通するのは、参加者の笑顔です。また、本校の隣は菁園中学校です。その地の利を生かし、小中連携が進んでいます。教職員同士の合同研修会、中学校での音楽や体育の体験授業、文化祭の合唱参観など、菁園中学校の校区が全て重なる花園小学校にとっては、複数回訪問することにより、菁園中学校のイメージや空気感を感じ取り進学への期待にもつながっていると考えます。また、双方で授業や休み時間の様子を参観することにより、研修会での話合いが充実したものとなっています。そこに共通するものは、児童や生徒の自己実現であり、自己肯定感の醸成であり、笑顔です。

本校の教育目標の一節は「笑顔いっぱい」です。これからも、学校、家庭や地域全体が、世代を超えて教育を通じたウェルビーイングの向上を目指していきたいと思ひます。

<研究推進校の実践紹介：桂岡小学校>

健康の保持増進を目指し、自らが生き生きと学ぶ子どもの育成
～体育・食育における指導方法の工夫を通して～

1 はじめに

本校は、小樽市教育委員会から体育専科教員の活用による体育の授業改善と栄養教諭を中心とした食に関する指導を両輪として取り組む実践校の指定を受け、重点的取組に位置付けて研究を進めてきた。今年度はその集大成として、家庭・地域と双方向の連携を意識し、日常生活での実践を目指す研究の深化・充実を図っている。

2 校内研究の推進

本校の研究は、「健康の保持増進を目指し、自らが生き生きと学ぶ子どもの育成～体育・食育における指導方法の工夫を通して～」を主題に3か年計画で研究を進めてきた。研究推進体制は、研修主事、体育専科教員、養護教諭、栄養教諭、低学年及び高学年の担任代表で構成する研究推進委員会を中心に研究構想の検討を行い、研究仮説と視点を踏まえ、低・高の各ブロックで指導案を検討し、実践・検証を行っている。

○ 研究仮説1：体育

- ・ 「時間」と「場」の設定を工夫すれば、子どもたちは仲間と共に「伸びる」楽しさを味わうことができるだろう。
- ・ 児童一人一人が見通しをもって体育の学習に臨み、主体的に課題を解決することで、日常での体力向上の意識が高まるだろう。



視点

- ・ 時間と場の工夫
- ・ 児童一人一人が意欲や目標をもって取り組める学習課題の提示

○ 研究仮説2：食育

- ・ 日常の学習指導や給食指導の充実を図ることで、よりよい食事の在り方や食の大切さに気付き、食生活の改善を目指す子どもが育つだろう。
- ・ 学校と家庭との双方向の連携を図ることで、自己管理能力が高まり、日常生活で実践しようとする子どもが育つだろう。



視点

- ・ 自分の生活を振り返る場の設定
- ・ 学んだことを家庭で生かすことができる指導の工夫と家庭との連携

3 研究実践

授業交流は、6月に第3学年学級活動（食育）「食事のマナーについて考えよう」、第4学年体育「走・跳の運動 高跳び」、9月に第2学年体育「ボールゲーム」、第5学年家庭科「食べて元気に」を担当と体育専科又は栄養教諭とティーム・ティーチングで実施したほか、12月に特別支援学級自立活動「食べて遊んでニコニコ元気」の授業を予定している。また、9月の授業交流では、研究協議において、運動が苦手な子へのアプローチの重要性、ICTの公的な活用、伝え合う場の設定などについて、後志教育局の甲谷指導主事、小樽市教育委員会の野里主査にご助言をいただいた。



4 おわりに

今年度の研究を発表する場合は、令和7年1月30日に北海道小学校家庭科連盟の近香奈子氏を助言者として招聘した公開研究会を予定している。体育・食育の両輪とした全校体制で取り組んだ研究成果は、今後、学力及び体力向上を目指す様々な取組を推進していく上での基盤となるものと考えており、持続可能な取組として継承していきたい。

所内検証授業について

小樽市教育研究所では、今年度、第13次研究の3年次目の研究を進めています。研究員による所内検証授業を2回実施しましたので、概要を紹介します。

<柴田まみ研究員（潮見台小）の検証授業>

日時 10月2日（水） 5年生算数

単元 分数の大きさとたし算、ひき算 5/9

（授業内容）

- ・本時は分母の違う分数のたし算のやり方を考える場面であり、児童は、ヒントや交流を通して自力解決をすすめ、主体的に交流する姿が見られた。
- ・指導者は日頃からいねいな振り返り活動を継続して行っている。そのため、本時の授業では、児童が自分のやることをしっかり押さえて学習を進め、学習内容を理解し、「だったら・・・」という観点で振り返りを行っていた。

（協議内容1）個別最適な学びの工夫 （1）学習過程の工夫 （2）振り返りの充実

- ・ほとんどの児童が図を活用して解決していたので、ヒントカードは有効に使うことができた。
- ・振り返りを積み重ねてきたために、本時で学習することが明確であった。
- ・思考・判断・表現に重きを置くなら、どうして通分する必要があるのかを考えさせるとよい。

（協議内容2）協働的な学びの工夫 （1）学習形態の工夫

- ・振り返りの「だったら・・・」では、帯分数について触れる児童がいなかった。図を生かして考えると、帯分数の場合はどうなるのかという思考になったのではないかと。
- ・全体交流の場面では、考え方がまとめられてから前に出て説明するのか、考えの途中でみんなで議論するのか、その目的が重要だと思う。

<寺下剛史研究員（花園小）の検証授業>

日時 11月8日（金） 1年生国語

単元 じどう車くらべ 10/12

（授業内容）

- ・もう少し対話をさせたかったが、時間的に余裕がなく、不十分であった。
- ・書き方に誤りがあったり、「しごと」のところに「つくり」を書いていた児童がいたが、確認しながら指導ができるとよかった。
- ・資料選びが難しかった。選んだ資料によって掲載量がばらばらだった。

（協議内容1）個別最適な学びの工夫 （1）学習過程の工夫 （2）振り返りの充実

- ・課題把握の場面や自力解決に向かう場面では、児童が個々に理解し、見通しをもって自分で進めていくことができていた。
- ・振り返り場面では、次時の学習内容について理解している児童が大半であった。
- ・1年生の段階では、文章をすらすら書けるようになることも大切なので、すべてデジタルではなく、ノートとの使い分けの工夫が必要である。

（協議内容2）協働的な学びの工夫 （1）学習形態の工夫

- ・個別の学習場面と交流場面を明確に分けるとよかったのではないかと。また、交流場面では「～について交流してごらん」など、交流の目的を明確にするとよかった。
- ・オクリンクの活用の目的は、他者参照であると思うが、他者参照している児童の姿が見られなかった。1年生では、自分のことで精いっぱいを感じる。
- ・句読点や助詞を抜かして書いている児童がいたので、全体で作業を止めて、気が付いたところについて指導するなどの配慮をするとよかった。

令和6年度第79回北海道教育研究所連盟研究発表大会（網走大会）
兼第66回全国教育研究所連盟北海道地区研究発表大会より

令和6年8月29日、30日の2日間、オホーツク文化交流センターで、上記の研究大会が開催されました。小樽市教育研究所からは、研究員がZ o o mで参加しました。

1 全体発表

第18次研究の概要

＜主題＞一人一人の子どもを主語にする学校教育の実現に向けて

○研究内容1 全ての子どもたちの可能性を引き出す「個別最適な学び」と「協働的な学び」
・「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実践した授業事例を収集し、普及していくという内容

○研究内容2 子どもの成長を支える連携・協働体制の構築

・道研連に加盟している各研究所や研修センターの連携の在り方を構築し、将来的に持続可能な体制にしていくという内容

2 記念講演

演題 「一人一人の子どもを主語にする学校教育の実現に向けて

～自立した学習者育成するための教育研究所・研修センターの在り方～

講師 国立教育政策研究所初等中等教育研究部長 藤原文雄 氏

内容

(1) 教育政策の流れ

①自立した学習者の育成

子どもたちに学びを委ねていくことが大切である。教師側がしっかりとデザインしていく中で、子どもたちが選択していくことが大切である。

②教育DX

子どもに考えさせたい教師ほどICTを活用していることが多い。授業観の転換やカリキュラムマネジメントをしっかりと行っていくことが重要である。

③循環型ウェルビーイング

子どものウェルビーイングを高めるためには、教師のウェルビーイングを高めることが重要である。

(2) 自立した学習者を育成するための教職員の在り方

子どもを主語にする学校教育にするためには、教師を主語にした研修が必要であり、教師が自立した学習者でなければならない。

(3) 研究所・研修センター指導主事の在り方

所長・指導主事ともに必要な資質として「児童生徒の成長を願って仕事に取り組むことができる」という項目の数値が高い。

3 対話・演習

○独立行政法人教職員支援の方の主導によりZ o o mのブレイクアウトルームで協議に参加した。

タイトル『「研修観の転換」の実現に向けて』

講師 独立行政法人教職委支援機構審議役

佐藤壽則 氏

独立行政法人教職員支援機構研修プロデューサー

佐藤悠人 氏

独立行政法人教職員支援機構特別研修員

森 茂之 氏

内容

①どのように力を深めたのか

・現場で課題に直面した時に書籍やネットで調べる ・先輩教員に聞く、まねる
・いろいろな授業を見て学ぶ ・授業を客観的に見てもらう ・相談できる場を設ける

②資料を参照しながら、意見交換をする

・6種類の資料が提示され、その中で目に留まった資料とその理由について、お互いに意見交換を行った。

③研究所として今後どのような研修を進めていけばよいのか。

・必要性に迫られる研修を教職員自らが選択していくことが大切である。また、生徒指導や学級経営など子どもたちの基盤がなければ「個別最適な学び」と「協働的な学び」は成り立たないので教職員の資質向上に係る研修も必要である。
・研究所は、各校の校内研修のテーマと内容を把握し、それを基に研修の内容を精査していく。